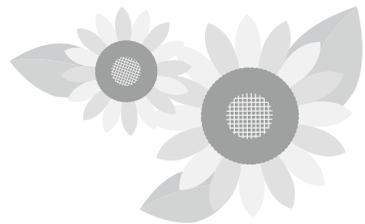


7月20日(日)



色々なネタをご用意しております



真夏の

寿司バイキング

1貫1000円(税込)〜



西田鮮魚店

072-5246

御用聞き便専用番号 ☎090-7125-5489 (旧庄原市内はご自宅に配達)

※御用聞き便は火曜日・木曜日・日曜日のみの配達

この度は、たくさんのお注文の注文ありがとうございました。スタッフ一同感謝申し上げます。
皆様こんにちは。7月から西田鮮魚店に本配属になりました、佐々木力駆です。
今回は初めての広告の文章を書いてみたいということと志願させていただきました。
最近は暑い日が続いておりますが、いかがお過ごしでしょうか？僕は毎日、体が溶けるんじゃないかと思いつつ過ごしています。しかしこの暑さに負けないくらい、鮮魚の方に元気をいただいているので、僕も皆さんに元気を与えられるような明るく大きな声を出していこうと思います。
今回の広告のおすめは、寿司バイキングということで、皆さんの好きなお寿司を好きなだけ選んで、自分だけのお寿司パックをつくりませんか？皆さんの期待にこたえられるように、いろいろなお寿司を用意してお待ちしております。
さて、今年は土用の丑の日が2回あるというので、皆さんウナギをしっかり食べてスタミナUPし、この暑い日々を乗り越えていきましょう。
まだまだ右も左もわからない僕ですが、元気に頑張っていこうと思うので皆さんよろしくお願いたします。

西田鮮魚店 佐々木 力駆

『国宝』 吉沢亮と横浜流星と

鮮コーポレーション(株) 代表取締役会長 西田 昌史



I 『国宝』

7月4日金曜日。午後4時30分。福屋8階の『八丁座』。私は『ぶぶ漬けどうですか』という映画のチケットを買おうとしていた。『ごひいき会員証』を出し、タブレットに表示される劇場の席の配置図を見る。ガラガラだ。いつもの前から4列目の真ん中の席『にの7』を指定して、会員価格の千円を払おうとした時、一つある劇場の大きい方の扉が開き、大量の人が掃き出されてきた。出てきた、という表現では追いつかない。まさに掃き出されたという感じだ。狭いロビーは、たちまちいっぱいになった。ほとんどが女性。驚いた私はチケット売り場の女性に聞いた。

「国宝?」「そうです」「すごいね」「すごいですね」

6月6日に封切りされた『国宝』という映画。私は、すでにソレレユで見ていた。

だから、この映画が前評判に違わぬ素晴らしい映画だということ、観客動員数も一カ月やそこらで400万人を超えて社会現象のようになっていくことも知っていた。知ってはいしたが、実際に扉から掃き出されるように出てくる人たちの目の当たりにして、その人氣に驚いてしまった。

そんなロビーの様子を見るときもなく見ていると、近くのソファに座った50才くらいの女性が少し興奮した面持ちで電話している。

「今、八丁座。映画を見とったんよ。『国宝』すごいよ。」

ぜったい見た方がいいよ。」
その気持ちわかる。私も映画が終わった瞬間、誰かに伝えたいという衝動にかられた。そんな映画だ『国宝』は。ただ、悲しいかな、伝える言葉が見つからない。もどかしい。たぶん彼女も、そうだったのだろう。だから、結局、最後は「見たほうがいいよ」と言うしかなくなる。

II 役者のなりきる力

それにしてもこの映画の何にこうも魅せられるのか。主役の喜久雄と彼の向こうを張る俊介の人生模様の不可思議さに思いを馳せた。

激流に巻き込まれ、流され、抗いながら年を重ね、それぞれの人生を完結していく様に心打たれ、彼らほど劇的ではないし、際立った立場に置かれたわけでもない私だが、それでも自分に重ね合わせ共感しつつも、反発する自分もいた。

喜久雄と俊介、二人の住む世界の理不尽さ、せつなさが3時間という時間に凝縮されている。まちがいになくおもしろい。でも、それだけではない。この映画は。

映画を見ながら、物語の世界に引き込まれながらも考えていた。この映画が私を引き込む力の核心を。

そして思い当たった。

主役の喜久雄を演じた吉沢亮と俊介役の横浜流星。

この二人だ。この二人の本気が映画に力を与えているのだ。喜久雄を演じる、俊介を演じる吉沢亮と、流星の生き様に圧倒されたのだ。役者という職業の二人の凄まじい熱量に私は息をのみ、言葉を失ったのだ。

彼らが舞いを舞うシーンが随所にある。

歌舞伎座を再現し、エキストラだろうけど満員の観客を入れ、本物の唄方、三味線、お囃子を配した舞台に立ち、歌舞伎役者になりきり舞いを舞う。
吹き替えではない。彼ら自身が舞っている。

吉沢亮がインタビューに、一年半かけて準備したと語っていたが、これだけの舞いを、歌舞伎役者が一生をかけて築き上げる舞いを、その一端とはいえ、これほどまでの高みで表現してしまう。言葉を失って当然だろう。

しかし、実は彼らだけではない。この映画が始まるやいなや、いきなり物語に引き込まれた。吉沢亮も流星もまだ登場していないのに。

彼らの子供時代を演じた2人の若手俳優、黒川想矢15歳、越山敬達16才。彼らの舞いに目を瞠ったのだ。彼らもまた梨園の人間ではない。言ってみれば素人だ。その彼らがこまでやるか。もう、何をか言わんやだ。

一方で、渡辺謙が演じた花井半二郎と田中泯の万菊。

73歳の私に彼らの生き様、彼らの発する言葉が刺さった。功成名遂を遂げ、人生を生き切った彼らの中にさえ、常に同居していた強さと弱さと……。

人生の終盤を迎えている自分が重なり画面に見入った。

III 李相日という監督

この映画を監督したのは李相日。

『フラガール』を撮った監督だ。脚本も演出も音楽もそして映像もみごとだった。

とくに舞いのシーンは圧巻だった。

映画ファンの私の知人は、古びたビルの屋上で踊る吉沢亮に、あの『ジョーカー』の階段で踊る場面を連想し感動していた。私はファイナールの舞いの音楽と映像にやられてしまった。圧巻だった。

歌舞伎がより歌舞伎らしく、時に歌舞伎を超えていた。

映画は監督のものという。納得だ。

IV 八丁座

映画館で見てこそ『国宝』の真価がわかる。テレビでは無理だ。スマホは論外。

「大きな画面で良い音で見てほしい」と渡辺謙も言っていた。一回目はソレレユで見たけれど、次は悦子と『八丁座』で見ると。八丁座は、劇場そのものが芝居小屋に由来する。だから、歌舞伎を見たと同じような感覚になれる。ゆったりとした席で贅沢感に浸れる。映画はどこで見るとかが大切だ。



追記

『ぶぶ漬けどうですか』は、いけずな京都を知るのにはいい。おもしろかった。

でも、まあ映画館に行かなくても、ソファに寝ころんで、『ぶぶ』をいただきながら見るといいんじゃないだろうか。

2025年7月20日